



DATA

名称 晩香廬
所在地 東京都北区西ヶ原 2-16-1
(飛鳥山公園内)
完成 大正 6 年 設計者 田辺淳吉

温故 知新

第 24 回

レトロ建築を歩く

ばんこうろう 晩香廬

こ としの 7 月 3 日から、発行が開始される新紙幣。新 1 万円札の肖像に選ばれたのは、生涯で 500 もの企業を立ち上げ「近代日本経済の父」と称される渋沢栄一翁だ。

天保 11 年（1840 年）、現在の埼玉県深谷市に生を受けた渋沢翁が、東京都北区王子の飛鳥山の邸宅を本邸としたのは明治 34 年（1901 年）のこと。

本邸は空襲で焼失してしまったが、大正 6 年（1917 年）に完成した同じ敷地内の別邸「晩香廬」と、「青淵文庫」（大正 14 年完成）は今日もその威容を保っている。今月と来月に渡り、新紙幣発行を記念して、この 2 邸を紹介していこう。

晩香廬は、渋沢翁の喜寿（77 歳の祝い）を記念して、清水組（現在の清水建設）により設計、建築、贈呈された建物だ。

設計したのは、当時の清水組の技師長であった田辺淳吉。芸術、工芸にも通じていた田辺は、使用する材料や仕上げなど、建物の隅々にまで配慮したという。

大きく窓がとられた談話室は、一見洋風の印象を受けるが、数寄屋造りの茶室などに見られる「船底天井」が取り入れられ、和洋折衷の趣ある空間が広がる。

本部には名栗仕上げ（削り痕を残す日本古来の加工技術）が、漆喰部分には見事な細工が施されている。照明にも、鶴や竜、雲、唐草等の精緻な細工がなされている。

談話室で最も印象的なのは、暖炉まわり。黒紫色のタイルが貼られ、暖炉の上には渋沢



渋沢翁の喜寿を祝い「寿」の文字が
あしらわれた暖炉上のタイル飾り



天井木部の名栗仕上げ、漆喰
飾り、家具や照明にいたるまで
細部にわたり洗練された細工
が施されている



談話室全景



翁の喜寿を記念して「寿」の文字がタイルで
デザインされている。
渋沢翁は晩香廬をレセプションルームと
し、国内外の賓客をもてなしたという。

